「元気に」の祈りむなし

ランラン

不眠の介抱も実らず

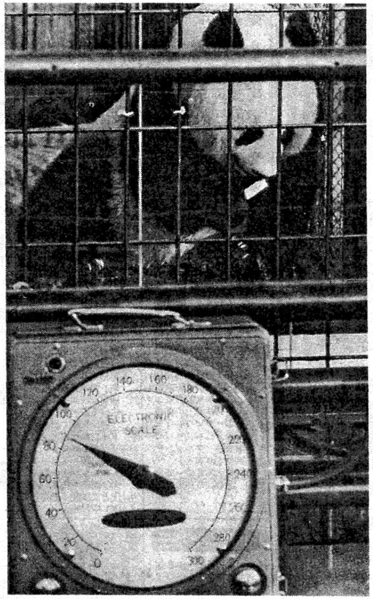
"女盛り"けなげな闘病

生きていてほしい、とみんなが祈っていた東京・上野動物園の人気もの、パンダのランラン。点滴、酸素吸入、人工透析という人間並みの看病も実らず、四日午前一時すぎ、急性じん不全に尿毒症を併発して息を引き取ってしまった。気のせいか、少しばかり丸みを失い、しぼんで見えるようなランランのそばで、ほとんど寝ずの介添えを続けた飼育係たちが声をあげて泣いた。今年こそは二世を、という期待にこたえることも出来なくなったランラン。あとに残されたカンカン（オス、八歳）はどうなるのだろう。人にたとえていえば、おもい半ばの、無念の死ではなかったか。

「食欲がなくて、ちょっと心配」と本間勝男パンダ飼育班長（五〇）が中川志郎多摩動物公園飼育課長（四〇）に電話してきたのは八月三十一日の朝だった。中川さんは八月初め転勤するまで上野動物園飼育課長としてパンダ飼育班のキャップだった。期待通りの妊娠の兆しか、いつもの夏バテかもしれない、とだれもが思った。中川さんは、その日、上野で開かれた会議のついでに「ちょっとのぞくだけ」のつもりでパンダ舎に寄った。獣医たちがぐったりしたランランの上にかがみ込み、懐中電灯で瞳孔（どうこう）をのぞいている。「まさか」と中川さんは自分の目を疑った。

そのまま徹夜の看病が続いた。本間さんはランランのまくら元にぺったりすわり込み、丸くて大きなランランの頭をなでながら「ダメだよ、しっかりしなきゃ」と話しかけ続ける。竹内啓・東大助教授が注射するたびに「ほら、痛くないよ！」とも。寝不足で目が真っ赤。急に老け込んだようにみえた。

「ランランが死んだ」という事実が、なぜか、まだ中川さんにはピンと来ない。パンダ舎へ行けば、いまでもすり寄ってきて、あのなまあったかい息を、フーッとふきかけてくるような気がしてならない。「ランラン！」と声をかけると、いまにもむっくり起き上がって「何を騒いでるの？」とでもいうようにゆっくり歩き出すのではないか、と。


この姿ももう…　ハカリの台の上でサトウキビを食べるランラン。体重計は90㌔を指している　＝48年1月

カンカンに比べ「手のかかる子」だった。来日した時四歳。ちょうど「童女から少女へ」変わる時期だった。まるで赤ちゃんで、無邪気一方のカンカンと違い、どこか人を寄せつけない「野生」を感じさせた。「こいつめ、上目づかいに人を見る」と飼育チームの人たちはおもしろがった。

それだけに、四十九年四月、最初の発情がきたとき、パンダプロジェクトチーム（十一人）はおどりあがって喜んだ。発情しないのは飼い方が悪いから。「うまずめ」なのでは、といった声が外部から聞こえていたからだ。

本当に慣れるのに四年かかった。時間がかかっただけに、カンカンよりかわいい、と思う。中川さんの吸うマイルドセブンのにおいをかぎわけ、遠くからでも鼻を鳴らした。昨秋の妊娠騒ぎの時は、乳房にまでさわらせた。野生動物が一番いやがることなのに、妊娠かどうか確かめるために中川さんが乳をしぼってみても、おとなしくしていた。

今年も交尾に成功した。三度目。妊娠の確率は一段と高い、とみられていた。今秋で十一歳。平均寿命二十五年前後のパンダにとって、まさに女盛り。子どもを産むのに最高の年代だった。

イギリスの動物学者デズモンド・モリスはパンダがもてる「20の魅力」を数えあげている。目が大きく見える、外形が丸っこい、ぶきっちょで、遊び好き、などなど。それにもし、日本での爆発的な人気の原因を付け加えるなら「カンカンとランラン二頭そろっているから」と中川さんは思う。

「幸せなカップルが恋をし、結婚して、子どもをつくる。子どもが成長し、親はゆっくりと老いてゆく」。ファンの多くはそんな「幸せな家庭」をパンダの上に思い描いていたのではないか。だから、たとえ訪れるにしても、パンダの死はずっと遠い先のできごとのはずだった。

パンダの病気と死因

パンダ飼育の教科書といわれる中国の「動物学報」によると、パンダがかかりやすいのは、胃腸の病気。子どものパンダに多く、エサが傷んでいたりすると腹痛を起こし、ほうっておくと胃腸炎になったりする。野生のパンダでは、エサについている寄生虫が病気の原因になることがあり、中国南部では突然の寒波で肺炎などで死んだ例も。このほか、てんかんや子宮炎、骨髄炎なども報告された。

中国以外の動物園では、飼育パンダ第一号といわれるシカゴのスーリン（オス、死亡当時一歳六カ月）が、のどに木の破片を刺して死んだのが最初。心ない見物客がいたずらしたためらしい。同じころ、ロンドンで死んだ「グランドマザー」の愛称で知られるメスのパンダは、ロンドン名物のスモッグでやられた、と取りざたされた。やはりロンドンのミン（メス、死亡当時六歳十カ月）は一九四四年、なぜかノイローゼ気味になりおかしな行動をしたあげく、食欲不振に陥り死んだという。

人情話しっとり 広い芸域

円生師匠 誕生日に死去

しっとりとした人情話。広い芸域。男の艶（つや）っぽさをただよわせた落語家、落語三遊協会長の三遊亭円生（さんゆうてい・えんしょう）師匠＝本名、山崎松尾（やまざき・まつお）＝が三日午後九時三十五分、千葉県習志野市の三橋整形外科耳鼻科病院で心筋こうそくのため死去した。告別式、喪主は未定だが、遺族には妻のはなさん（八〇）らがいる。はなさんの話によると、この日、円生師匠は七十九歳の誕生日。戸籍上は明治三十四年五月十三日生まれになっているが、本人は「明治三十三年九月三日生まれだ」と話していた。このため一門の弟子たちも全員がこの日を「七十九歳」の誕生日として東京都中野区中央一ノ二九ノ一〇、美野マンション四〇五号の自宅にお祝いに向かうはずだった。果たして、誕生日はいつだったのか。弟子たちは「やかましい」師匠に、もう確かめることはできない。

この日も後援会で一席伺う

円生師匠はこの日、習志野市内の円生ファン後援会発足式に出席、「大名小咄桜鯛」を演じていた。師匠は二、三度せき込んだが、懐中からすっと紙を出し、たんをふいた。十分の予定のところ、二十五分間話し、しっかりした足どりで座をおりたという。

しかし、楽屋にさがった直後の午後六時四十分ごろ、苦痛に襲われ、弟子たちが休憩室に運んだ。ちょうど会場内にいた田中・習志野医師会長らが応急措置をとり、救急車で習志野市津田五丁目の三橋整形外科耳鼻科病院（三橋稔院長）に運んだ。

病院についてから、いったん意識がなくなったが、また持ち直した。この直後、三橋院長が「いかがですか」とたずねると「楽になりました」。そして最後に「横向きに寝かしてほしい」とつぶやき息を引きとった。

はな夫人がタクシーで駆つけたが、師匠は、夫人に語りかけることもなく他界した。「あの人にもう少し楽をさせてあげたかった」と立ちつくすはなさん。「きのうは朝十時から夜の十二時まで、近く出版する本の校正を続けていた。今日はいつもより一時間遅い朝九時に目をさまして『きょうは行きたくないよ』と話してました。こんなことは一度もなかったことだよ」と夫人。そばで一番弟子の円楽が「あしたは青森に二人で行く予定だった。私はあす一人で行って師匠の分もしてくる」と、仕事を大事にした師匠の遺志を守る言葉だが、ガックリ肩を落としていた。

天皇ご一家にも一席＝48年

「苦労は芸にひびく」＝今年1月

歌舞伎座での独演会を語る＝今年3月

大阪市の生まれ。五歳で上京、六歳から義太夫で寄席に出演。豊竹豆仮名太夫と名乗ったが、数年で落語界に転じ、橘家円蔵門下で円童、小円蔵を経て、大正九年、円好となり真打ちに。さらに円窓、円蔵を名乗った後、昭和十六年に六代目円生を襲名した。同四十年からは落語協会会長。

ひと口に「色気のある芸」といわれたが、芸域の広さでは落語界の第一人者と称された。「まだ伝え残す話がたくさんあったのに、めい土へ持っていってしまった」と随筆家の江国滋さんは嘆く。

四十八年三月には、落語家として初めて天皇、皇后両陛下に招かれ「御神酒徳利」をお聞かせして話題を集めた。

五十三年五月には、真打ち昇進問題から落語協会会長の柳家小さんと対立、一門の弟子を引き連れて同協会も脱退、約五十人で「落語三遊協会」を発足させた。その後、自派のみで公演を打つなど独自の歩みを続けていた。

この三月二十九日には東京・歌舞伎座で独演会を開いたが、一、二階とも補助席が出るほどの盛況で、「円生人気」の根強さをうかがわせた。落語協会との対立も、最近"雪どけ"ムードにあった。八月末に開かれた協会側の真打ち披露にお祝いのテープを贈り「けんかもこの辺で……内政干渉抜きで、きれいなおつきあいをしたい」などと話していた。

三遊協会の今後心配

芸能評論家　山本益博さんの話　押しも押されもしない落語名人の一人だった。今年五月に亡くなった春風亭柳橋さんに続いてまた一人明治生まれの寄席芸人が消えたわけで、なんとも残念だ。芸歴七十年以上で、伝統の古典落語を守るのに力を入れレパートリーは少なくとも二百以上は持っていた。そして「お客に同じ話を聞かせるのは申し訳ない」といって同じ話は一年に二度やることはなかった。同じ名人の林家正蔵さんなどと意見が分かれたりするなど、落語界でのトラブルもあったが、落語界ではまだまだ活躍してもらわなければならない人だった。円生さんの死で分裂した三遊協会がどうなるか心配だ。